

登山報告書
----中崎尾根から槍ヶ岳へ----

文責：三浦

<プロローグ>

私は 35 年前の 10 月に、友人と二人で双六岳～西鎌尾根経由で槍ヶ岳を登った。しかし雪山の槍ヶ岳登攀は初めてで緊張した。還暦を過ぎた自分の体力で風雪の槍ヶ岳に到達できるのか？若干不安があった。不安を解消するために、事前に中央アルプスの木曽駒ヶ岳の上松尾根を登って体力トレーニングをした。ところがそのトレーニングの下山路で、樹の根につまずいて転倒した際に突出した根で左大腿部を強打した。数日しても圧痛が消えない原因は内出血が起こり、血腫を形成した為だと考えた。その受傷から 9 日目で左大腿部にまだ圧痛があるのに槍ヶ岳登山に挑戦するのは無謀だ。私は圧痛のある左脚をかばいながら雪道を歩き始めた。4 時間ほど歩いて滝谷避難小屋に近づいてきた頃から左脚でなく右膝が痛み始めた。内心「入山初日から膝が痛むようでは、とうてい槍ヶ岳に到達できない。」と弱気になった。ところが、滝谷避難小屋で一晩寝たら、両足とも不思議に痛みが消えて、それから 3 日間気持ち良く歩き続けた。ゆっくり歩き、ゆっくり休息する間に血液循環が促進されて、血腫が吸収されたのかな？

<メンバー> 山口 (CL、食料)、真野 (装備)、三浦 (SL、記録)

<行程>

1 月 4 日：新穂高温泉(7:53)→穂高平小屋(9:15)→滝谷避難小屋泊(12:21)
1 月 5 日：滝谷避難小屋(6:33)→槍平小屋(7:58)→奥丸山分岐(9:57)→中崎尾根 標高 2350m テント泊(11:14)
1 月 6 日：標高 2350m テント(6:12)→千丈沢乗越(9:50)→西鎌尾根→槍ヶ岳山荘(11:21)→登頂(12:14)→槍ヶ岳山荘(13:50)→標高 2350m テント泊(16:53)
1 月 7 日：標高 2350m テント(7:02)→奥丸山分岐(7:38)→槍平小屋(8:45)→滝谷避難小屋→新穂高温泉(11:22)

<行動記録>

1 月 4 日小雪。7:53 登山届けを提出してトイレを済ませて出発。

12:21 滝谷避難小屋着。

滝谷はほぼ完全に雪に覆われていた。幸い避難小屋から少し下りた箇所に谷川の水が流れが見える水場があった。テルモス 900 ml×3 本、プラティパス 2L×2 本とコッヘル大の合計 8L の給水ができた。水も十分に確保できて安心して体を休めた。荷揚げした日本酒もワインも飲み干した。さらに避難小屋の中には紙パックに残された日本酒を見つけて、それも飲み干してしまい、いい気分になって滝谷避難小屋の中にテントで温かく寝ることができた。「滝谷避難小屋には幽霊が出る。」という伝説がある。私は幽霊はどういう音を出すのか？その音源を調べて

みようと思って楽しみにしてシュラフに入って耳を澄ませた。滝谷避難小屋の夜中に一晩中響いていたのは、仲間のイビキだけだった。残念。

1月5日 快晴：

6:33 滝谷避難小屋出発

7:58 槍平小屋で小休止。そこから中崎尾根の稜線に出る奥丸山分岐までの急登は山口さんが先頭でラッセルした。

11:14 中崎尾根平坦地（標高 2350m）に到着。山口さんは、さらにその先まで偵察に行っている間に、真野さんと私の二人で比較的平坦な場所を 1.2m ぐらい掘り下げて地ならしをして、十分な広さのあるテントサイトを整備をした。周囲を盛り上げて、しっかり防風壁対策を施した。トイレも防風対策をして快適な生活環境を整えた。テントサイトから明日登る予定のルートがよく見える。図2に四角で囲われた部分が核心部である。

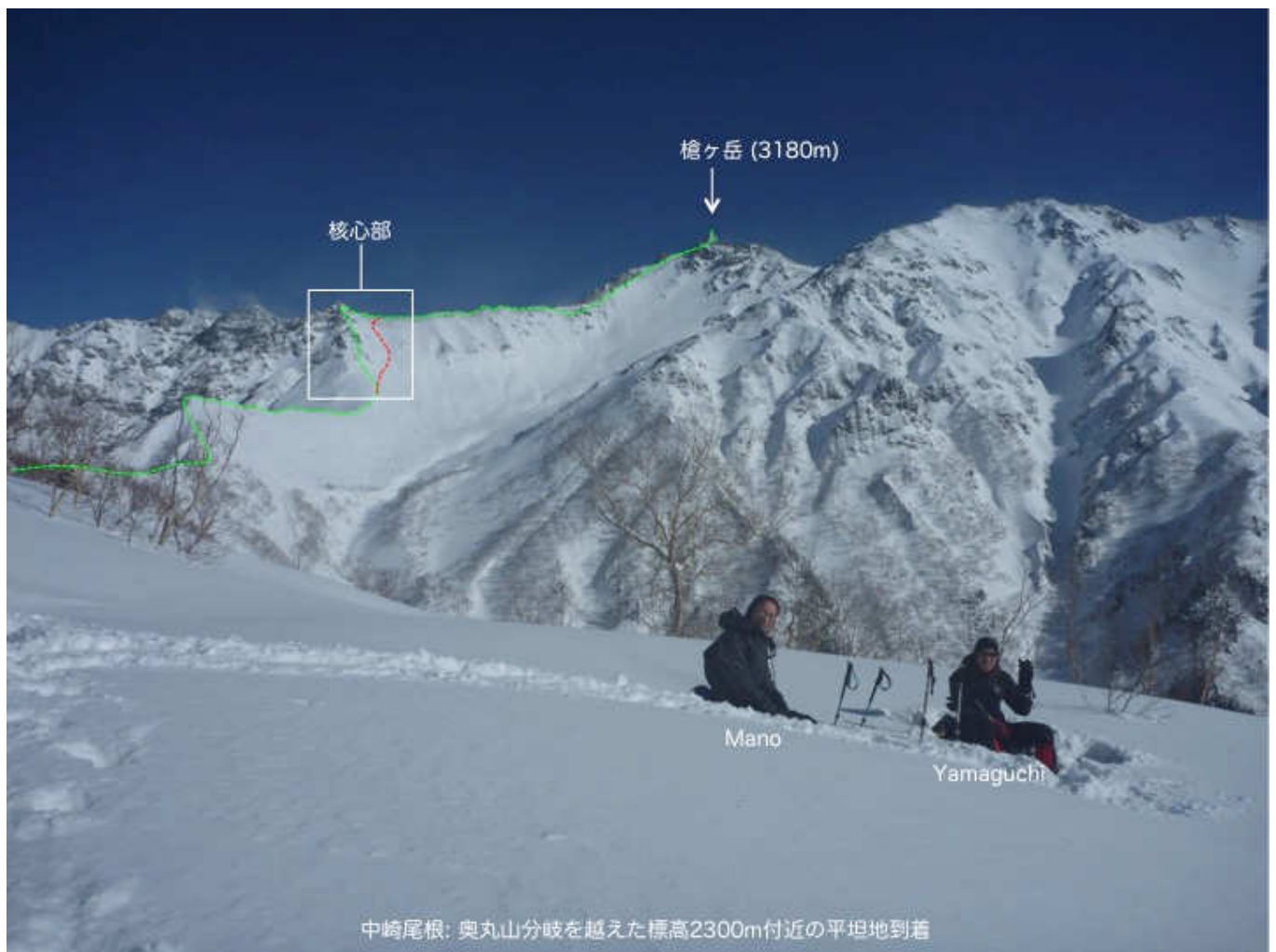


図2 中崎尾根テントサイト。四角で囲まれた箇所が、中崎尾根から西鎌尾根に抜ける部分の核心部分

16:00～16:20 の NHK ラジオ第二放送で気象庁発表の気象通報を受信して天気図を作成した。30年ぶりの天気図作成だ。4 hPa ずつの等圧線を書くことも忘れていたが、何とか天気図風の

概念図は描けた。日本列島は移動性高気圧圏内に入る。このまま 2～3 日は非常に安定した天気が続く予想ができた。テントから正面に槍ヶ岳から西穂高まっくきりと夕日に輝いていた。幕営場所からの眺めは本当に素晴らしい。山口さんはテントから顔だけだしてタバコを吹かしている。夜は満天の星空となり半月が輝いていた。

1 月 6 日 快晴：

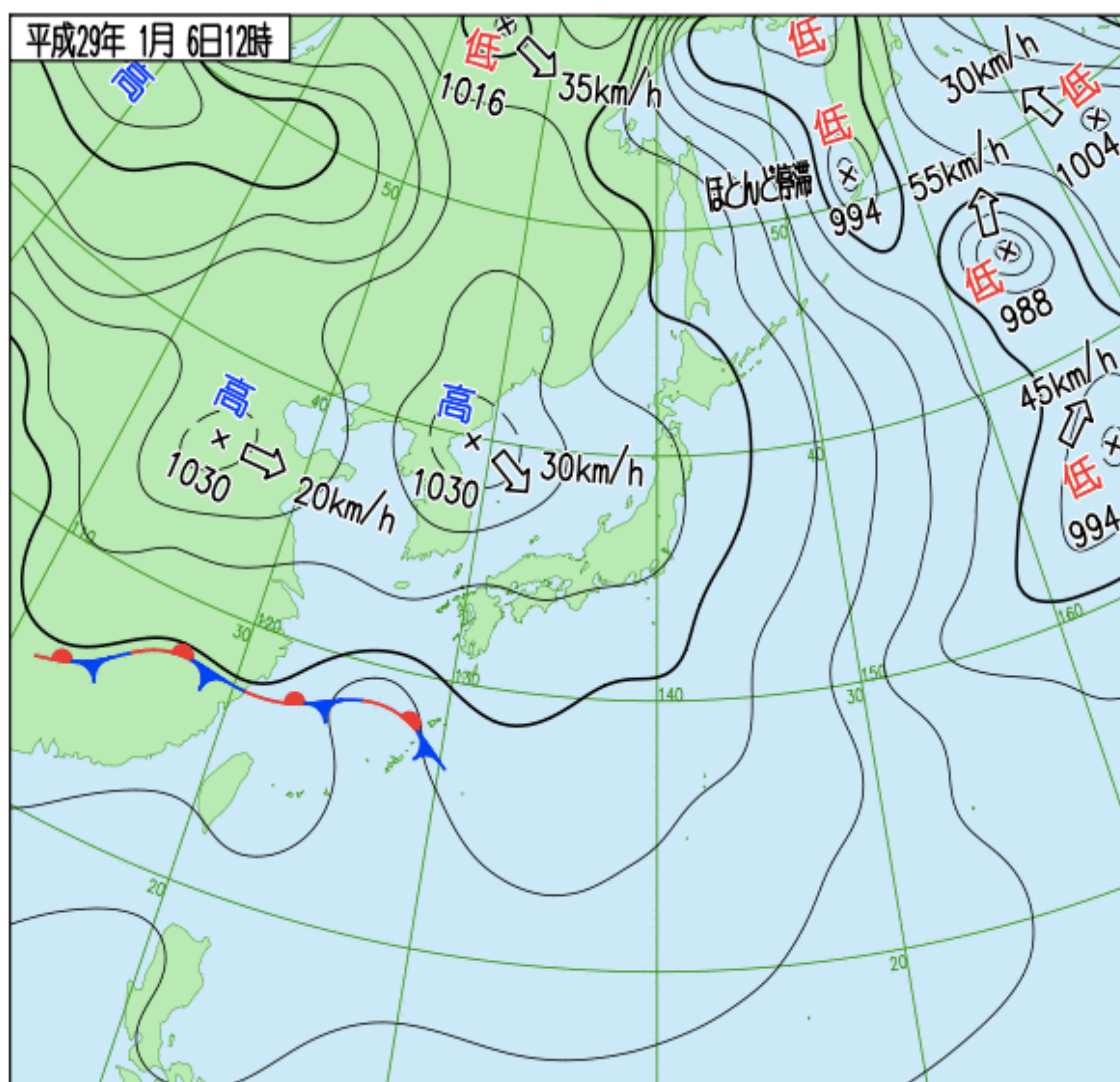


図3 槍ヶ岳アタック当日の天気図

引用：気象庁発表の地上天気図。槍ヶ岳アタック当日の 12:00 の気圧配置。
槍ヶ岳の山頂でも快晴無風状態となった。

6:12 ヘッドライトを点灯。アイゼンを装着してピッケル装備だけで、ストックはテントの固定に使ったままにして、中崎尾根の 2350m テントサイトを出発。前日にテントサイトから観察した中崎尾根から西鎌尾根に抜ける急峻な岩稜帯の通過は難しかった。おそらく 2500m の雪稜線の最上部からトラバースして赤旗が立っているルート沿に沿って夏道の分岐点（千丈沢乗越の道標）の方向へ抜けるのが一般ルートだろう。山口さんは周囲の雪の状態を観察して、雪崩の危険性を考えて、赤旗が立てられているこの雪原の簡単に見える赤旗ルート（下図の赤色破線）

は選ばず、敢えて西鎌尾根へ直登する急峻なルート（下図の緑色の破線）を選んだ。その結果、45度以上の傾斜がある雪壁を越えて、さらに岩稜帯を登攀することになった。岩稜帯の取り付きに2本のハーケンが2m間隔ぐらいで打ってあった。私たちはこの取り付け点でハーネスを装着してザイルを結んだ。約25mの3級程度の岩稜帯を超えた所で西鎌尾根の一般ルートに合流した。



11:21 槍ヶ岳山荘到着。スコップをデポし、槍の穂先に向かった。私は37年前の10月に槍ヶ岳の穂先まで夏道を登った経験はある。当時も鉄ハシゴがかかっている、それを登り切った所が頂上だった。頂上の祠の北側に北鎌尾根が続いている。私は右手でピッケルを掴み、ピックの先で岩の細かい凹みに引っかけてホールドとして使った。槍ヶ岳のピークに立った瞬間に、前後左右360度の景色が広がった。周囲に自分たちより高く遮るものは何も無い。冷たい強風を覚悟していたが、驚くことに無風快晴の幸運に恵まれた。下山路では、Yamaguchiさんにザイル確保してもらって慎重に下りた。核心部は懸垂下降をした。

14:00 槍ヶ岳山荘帰還。往路をそのまま下山する途中で、日没が近づくに従って、雪が深いアーベントロート（オレンジ色）染まって、空はますます青く変化していく。わずか15分程度の色の变化は感動的だった。残念ながら目で見てこの感動的な色彩を、写真に記録したいと思った。

けれども、写真ではどうしても平凡な色になって感動は伝えきれない。網膜に焼き付けた感動的アーベントロートを、いつか絵画として表現してみたい。

16:53 中崎尾根標高 2350m のテントサイトに日没と同時に到着。

1 月 7 日快晴：下山するだけだから気楽だ。7:02 快晴無風雨のテントサイトを出発。奥丸山分岐→槍平小屋→滝谷避難小屋→新穂高温泉 11:22 着 2 泊 3 日かけてゆっくり登ってたルートを下山はたった 4 時間 20 分で下りた。

<山行の目的>

○ 槍ヶ岳登頂：達成

○ 軽量化：達成

新穂高温泉駐車場で出発前に体重計で測定したところ 3 名ともザックの総重量が 17.7~19kg に抑えることに成功した。ただしこの重量には、歩行用ストックは含めていない。天候が安定していることが天気予報で確認できたので、Yowie（オーストラリア製スノーシュー <http://www.yowies.com.au>）は持たないことにして駐車場に置いたので、通常の雪山フル装備よりも 1.33kg 軽い値になっている。具体的な装備の軽量化の内容は中崎尾根偵察山行の報告書に記載した。

○ 雪山テント生活：

（1）コッヘルを引っくり返した。

まだ低温の水の状態だったのが不幸中の幸いであり、火傷などの被害はなかった。鍋を火にかけている間、口酸っぱく「だれか必ず抑えている。テント内で動く場合には、必ず声をかけてコッヘルを保持しろ。」と言われ続けてきた私は、体をひねった瞬間に座っていたマットから体が滑り落ちて私の足がコッヘルを蹴り飛ばした。その結果、中の水をすべてこぼれた。私が載っていたマットは、Free Light のシュラフに装着された状態で、さらにそれがシュラフカバーで覆われていたために、非常に滑り易い構造になっていた。狭いテント内で体を動かす際に、細心の注意が必要であることを痛感した。

（2）水の凍結に注意

水を入れたプラティパス（ハイドレーション容器）を就寝時に入口付近に置いたまま寝たところ、翌朝までに完全に凍結した。コッヘルで湯を湧かして、口元を湯煎して少し融かした後に、お湯をプラティパスに注いですべて融解させた。

（3）燃料不足

最終日の朝のラーメンは作ることができたが、お茶を湧かす段階で燃料が枯渇した。今回は、「0.2L×人数×宿泊数」の計算式で、 $0.2 \times 3 \times 4 = 2.4L$ 準備して入山した。この計算式は MSR Whisper Light の消費量の経験値である。今回採用した SOTO 製 SOD-371 MUKA ストープは

発熱量が多い分、燃料消費量も多いことは想定していなかった。コッヘルに作った 1.5L の水を引っくり返して再度水を作った失敗による損失の影響もあるけれども、初日は滝谷避難小屋で谷川から水を汲むことで、8L 分の水を作るための燃料が節約できている。SOTO を使う場合には、「0.2L×人数×宿泊数」の計算式では足りない。「0.25L×人数×宿泊数」程度のガソリンを最低限用意するべきだろう。なお、2 名で 2 泊した木曽駒ヶ岳の登山では 1.4L のガソリンを消費した理由は、スパゲティ、チーズフォンデュなど食事に凝って燃料を大量に使ったからである。

（４）テントマットをテント側壁の断熱材と活用する

大きめのものを用意した。就寝時に人と人が接する側のシュラフは比較的暖かい。ところがテントの壁側は外気温近くまで冷える。テントマットを敷く際に、中央の重なり部分を少な目にして、テント外壁側に巻き上げるようにすると壁の断熱材となって防寒対策になる。実際にはこの配慮をせずに床面だけに敷き詰めて大きめのマットを有効活用できなかった。

（５）ボールペンのインク

筆記用具として用意した通常のボールペンの出が非常に悪くなった。低温で上を向けても筆記できる加圧式のボールペンが市販されているので導入を検討しよう。

（６）水分補給の重要性

軽量化を考えてナッツ類、ジャイアントコーンなど乾燥した食品をレーションとして用意した。ところが実際の行動中に乾燥したレーションを食べる気にならなかった。アタック行動中に摂取できたのはテルモスに入れた液体だけだ。アクエリアスには電解質にビタミン類やアミノ酸まで配合されている。特に OS-1 粉末はカリウムイオンが強化されてスポーツの水分補給として理論的には素晴らしい飲料である。今回の槍ヶ岳アタック行動には往復 10 時間行動となり、その間に 0.9L を飲み干した。それでもまだ脱水傾向になり、尿は濃縮された。

（７）ブス板を排して、カーボンファイバー布製のバーナーシートを導入した。SOTO に付属しているアルミ製の円形反射板と併用して床マットに熱によるダメージを与えないことを確認できた。多少床に凹凸が生じて布製だから変形して安定する。収納が楽である。

（８）テントの固定のためにストックを逆さにして使うアイディア。

ストックの石附を下にしてリングを雪に埋め込んでしまうと、リングが埋め込まれたまま雪が固まってしまうと、非常に抜くのが難しくなる。ストックをペグ代わりに使う場合には、リング部分を埋め込まないように逆さ向きに使うのがコツのようだ。（山口さんはリング部分を埋め込んで、抜けなくなった失敗をしたことがあるらしい。）

私は入山初日は両足が痛かった。ところが翌朝は、痛かった両足とも痛くないので不思議だった。プロローグで記載したように私は歩きながら「ゆっくり歩き、ゆっくり休息する間に血液循環が促進されて、血腫が吸収されたのかな？」などと我田引水的な解釈をしていた。しかし、下山してから冷静に考え直してみると「アドレナリンの影響で痛覚が鈍磨した」状態と考えるのが正しいように思う。必死に登山する間は痛みを感じにくい。しかし、決して傷は完治した状態ではない。実際、私は下山した 2 日目頃から、再び左大腿部の打撲箇所の圧痛を感じ始めた。やはり傷は完治していなかったのである。医学的に考えて「痛みが消えるまで安静にして、傷が完治してから登山する。」という考え方が常識的だが正しい判断だった、と反省している。痛みが消失した解釈はともかく、無事に帰還できてよかった。隊員の安全を確保するために、危険と思われる箇所では躊躇せずにザイルを出し、全員の体調をよく観察しながら行動していただいたリーダーの山口さんの配慮に心から感謝しています。真野さんは下山路で最後まで歩く速度が落ちなかった体力に驚いています。まだこの先 20 年間は現役登山家として登山を楽しめるでしょう。